

上毛のイワクラと聖ライン

火山と天空への信仰を指し示す巨石の配置について

イワクラ(磐座)学会理事 谷口 実智代



1. 熟成された時間

2010年の「イワクラサミット in 上毛」に参加して、早くも1ヶ月が過ぎようとしている。サミットで訪れた久しぶりの関東。そして不思議と我が故郷・宮崎と似た景色。もうそんなに時間がたつたのかと、感慨が深い。なにより荒々しくもたおやかな上毛三山の姿と、圧倒的な迫力で存在する巨大なイワクラたちの思い出は、全く色あせることなく、1ヶ月という時間の中で熟成され、私の中から湧き出るよう、いろんな想いが巡っている。そこで現地を歩いて気付いたこと、感じたこと、それを元に調べたことなど、現地調査で尋ねたイワクラについて考察してみたいと思う。

2. 棚名富士

まず宿泊地として訪れた棚名富士と棚名湖について考えてみよう。地図で確認すると、まるで白と黒の渦が円を描く太極図のように、神南備型の山と湖、つまり火の山と湖水、

火と水、天へ向かう三角と地に穿たれた三角という陰陽の理を表す対極的な配置にため息が出る。またこの地上の大極図を守護するかのように、掃部ヶ岳や天目山などの榛名の外輪山が取り囲む様は、自然の曼荼羅図とも言うべきか。なかでも特筆すべきは地上の大極図・榛名富士と榛名湖の美しさであろう。すでに紅葉が始まり色付いた山々が、鏡のように静かな湖面に映り込む。どんなに素晴らしい絵画よりも、おそろしいほどの中の美が息づいていた。その圧倒的な自然の美が、あれだけの高地に存在するとは思つてもみなかつたのだ。天に最も近い位置にある湖は、ただそれだけで信仰の対称になりうる力を持つ。どの方向から見ても変わらぬ優美な姿で湖面に姿を映す榛名富士を浮かべた天の湖ならば、どのような信仰の形をこの地に刻んだのだろう。いずれにしても、この榛名富士と榛名湖が、当地の山岳信仰や巨石信仰に重要な影響を与えていたと確信した。

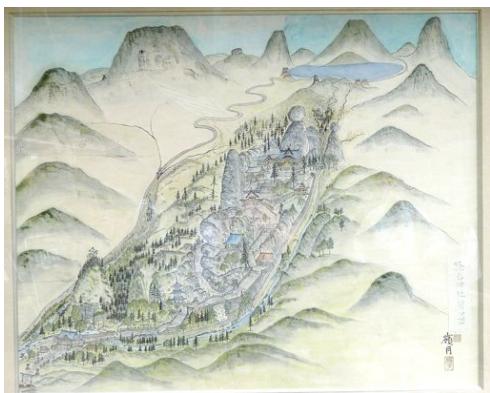
社」と記された説明板が立ち、四つ

つじ、分岐点等を守護する神である

ことが記されていた。また、「さいの

かみ」という読み方から、「妻神」つ

まり女性を守護するとして良縁、出



榛名神社の境内図

産、子育ての神である旨が記されている。小さな祠は薄暗い洞窟の前に建つ。これは、暗闇に口をあける黄

泉の国からの来るモノを遮るために祀られたものだろうか。古来から洞窟は女性そのものに見立てられる。

万物を産む靈力を持つ女性自身は、善きモノも悪しきモノも産み出す神

秘の闇だ。その闇の入口、小さな祠

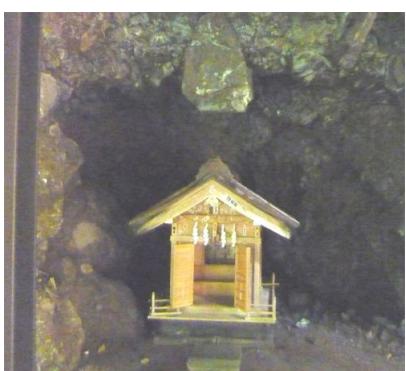
近年、パワースポットとしても高名な榛名神社の詳しい説明は、前号の会報にて皆神隆氏によつて詳細に紹介されているので、ここでは割愛させていただく。そこで私は榛名神社の巨石信仰について考察させていただくこととする。

(1) 塞神社（さいのかみしゃ）

本殿に向かう参道沿いに、ぽつかり口を開いた洞窟があつた。「塞神

が「塞神」として祀られたのだろう。洞窟と石への信仰の関係をうかがわせる小祠だ。

述は大変興味深い。



榛名神社参道・塞神社

(2) 御姿岩（みすがたいわ）

この御姿岩が榛名神社の御神体岩であることは間違いないだろう。岩の足元に、食い込むように榛名神社の本殿は建てられている。本殿の裏、御姿岩に接する壁には扉が設けられており、扉の向こう側には洞窟が広がっているそうだ。洞窟の奥は固く狭されており、60年に一度の丙午還暦大祭のときでさえ、扉の奥をのぞき見ることはできないらしい。ただ、神仏分離のときの記録に、弥生土器らしい6つの瓶と崩れた2つがあつたと記されたそうだが、この記

れる以前は、この前歯のような形の石が「塞神」として祀られたのだろう。洞窟と石への信仰の関係をうかがわせる小祠だ。

榛名神社の祭神は火の神・火産靈神と土の神・埴山姫神。火で焼かれた土は土師器になる。焼き物だ。中世以降は「満行権現」と称され、「元湯彦命」が祭神とされていたそうだが、明治元年に現在の二柱に改められたというから、6つの瓶から連想された神名なのだろう。しかし、これはある意味的この地に伝えられた古かららの信仰を如実に物語つていると思われる。天上の湖水・榛名湖をたたえる大地から産み出された土の瓶。それは榛名富士の姿だ。その両方を腹に抱えた御姿とは、大地の神、火山である榛名山全体を現している。火や土や水、万物を産み出し、腹に抱えた榛名山という火山全体を女神の体にたとえ、その姿を現したもののが、御姿石なのだろう。別名である地蔵岩の地蔵にも、「胎内」「子宫」の意味がある。榛名神社と榛名富士、榛名湖の間には、明確な関係が記されてはいない。そうだが、御姿岩の意味を考えると、無関係とは到底思え

ない。なおかつ、榛名神社の本殿の前に立ち、その背後の御姿岩に向かって参拝すると、榛名富士および榛名湖に向かつて祈りを捧げることになる。そう、榛名富士と榛名湖、御姿岩、本殿は直線上に並んでいるのだ。そのことからも御姿岩が榛名富士と榛名湖、またそれらを含む榛名山全体を現していることに間違いはないだろう。そしてこの祭祀ライン

が、真北から東に20度傾いていることを記しておく。



榛名神社・御姿岩

(3) 瓶子（みすず）岩とヌボコ岩
実は榛名神社を訪れた際に、もつとも心を引かれたのが、瓶子滝と瓶子岩である。ふつくらと柔らかな曲线を描く瓶子岩の、中央をひとすじ流れる瓶子滝。その対面には、鋭く天を貫くヌボコ岩がそそり立っている。これは大地の陰陽を現している。和歌山県勝浦の那智の大滝は、女陰を表現しているというが、こちらの瓶子滝も、そのものぞばりの姿を現



榛名神社・瓶子滝と瓶子岩

していると言えるだろう。丁度参拝を終えて帰路につき、双龍門から階段を下りたとき、瓶子滝の上空に秋分から間がない朝日が顔を覗かせていた。今まさに瓶子の女陰から産まれ出た陽の姿だった。この大地の女陰の対面にそそり立つヌボコ岩は、大地の男根だ。春分の日、そして秋分の日の日没、瓶子滝の真西にそそり立つヌボコ岩の陰は、瓶子滝に影を落とすだろう。そして瓶子岩は又

ボコ岩の精を受けるのだ。そうやつて大地の精を受けた陽が産みおとされ、命の水が絶え間なく湧きいづる。それが瓶子滝である。



榛名神社・双龍門とヌボコ岩

西太陽信仰ラインが存在していることを確認した。それらのラインに、壺と水が象徴として使われていることが面白い。それは、薬師如来が手にする薬壺か。または火山神の性格を持つというかぐや姫が残した不老不死の仙薬か。大地の女神が醸しだす甘露の水は、榛名川となつて地上を潤している。

4. 産泰神社

先に訪れた榛名神社もそうであつたが、ここ産泰神社にも木花咲耶比咩命が祀られ、安産の守り神となつてゐる。上毛三山の一つ、赤城山を北に仰ぎ見る配置から、火山である赤城山への信仰をうかがわせる。こゝにも現れている「火山→木花咲耶比咩命→巨石→安産」の信仰の形は、見事な建築技術をみせる双龍門も、

山岳信仰とは別の聖ラインを形成していることを、現地見学の際に渡辺豊和会長が発見された。私もまた榛名富士・榛名湖を向く真北から東に20度傾いた祭祀ラインと、瓶子壺と水が象徴として使われていることに対する薬壺か。または火山神の性格を持つというかぐや姫が残した不老不死の仙薬か。大地の女神が醸しだす甘露の水は、榛名川となつて地上を潤している。

(1) 盆状穴を持つ巨石

産泰神社のイワクラを考える上で、中心に据えるべきは巨大な盆状穴を持つ巨石だろう。その石は一連の巨石の中でもっとも高い位置にある。一見雑然と積み重なる巨石をイワクラと成しているのは、この盆状穴を持つ巨石と、それを基点として手を加えられた配置だ。イワクラを語る上でたびたび論議に上るのが、イワクラが人為的なものなのか、自然の造詣なのかという問題だ。おそらく、その両方が存在し、また双方のミックス、つまり部分的に手を加えて形を整えたものも存在するだろう。産



産泰神社

さに巨石の神殿の中核をなす存在だ。そのいくつかの例を考えてみたい。

(2) 女陰を象るイワクラ

社殿の並びの裏側、西を向く産泰神社とは逆に東側から巨石群を眺めると、不自然な一角に気付く。微妙なバランスで岩屋の形に石が組まれ、その奥まった部分に石が縦に差し込まれている。このような石組みは、九州では「岩屋觀音」と名付けられた巨石群でよく見られるのだが、関東にもこの法則が当てはまるとすれば、これは女陰と子宮を現す石組みだ。岩屋のように洞窟状に整えられた部分が子宮で、縦に差し込まれた石は小根を表している。この中に籠り、祈禱を施したのだろう。火をたいた跡が確認された。ひとつは古く、石が赤く変色している。もうひとつは比較的新しい。まだ黒いすすが付着していた。この女陰石の中心、小根石と、先の盃状穴を持つ巨石を結んだラインが真北から西に20度傾いたラインで、これはゾロアスター



産泰神社の女陰・子宮型のイワクラ

教の聖ラインであるらしい。火をいた跡もあり、現地にて渡辺会長にも確認していただいた。

(3) 聖樹と聖ライン

このゾロアスター教の聖ラインを指し示すのは、巨石の並びだけではない。もうひとつ、面白い目印が存在した。南九州で、古い聖地を訪れるべし必ず目にする植物がある。ビロウ樹だ。これが1本だけぽつんと立つてたりすると、周囲を氣をつけてしまうものだ。たとえば古い聖地として知られる宮崎県の青島は、天然のビロウ樹の群生地だし、沖縄ではクバと呼び、一種の聖樹として知られている。このビロウ樹の葉から扇や笠を作る。民俗学者の折口信夫や吉野裕子は、扇の原型をビロウの葉に求め、呪具であると述べている。古代天皇制においても、神聖視されていたらしく、この葉を用いた檜榔毛の車は、上級貴族にのみ許された牛車であった。そんなビロウ樹が、盃状穴を持つ巨石と女陰型のイ

ワクラの延長線上、藪の中に1本だけ立っていた。もちろん、それほど古木ではない。目印として植えられてから、何代目かの比較的若いビロウ樹であろう。このビロウ樹は、ゾロアスター教の聖ラインのほかに、冬至の日の出を示すライン上にも植えられていた。孟状穴を持つ巨石と巨石群の東側に門柱のように建つふたつの巨石は、真東から南に30度傾いた冬至の日の出と夏至の日の入りをつなぐラインを指し示している。そのラインの延長線上の藪の中に、またビロウ樹が立っていたのだ。誰かが意図的に植えた可能性がある。女陰型の石組みも、聖樹としてのビロウ樹も、はるか日本の南の地の古代信仰と共に通するものだ。もしかしたらこの場所には、日本列島の巨石信仰および信仰形態の古層を垣間見る法則、そしてそれを伝えた「誰か」の足跡が残されているのかもしれない。なお、産泰神社の巨石群の中にも、船型の石が置かれていたことを記しておく。

5. 名草巨石群

(現地案内板より転載)

「名草の巨石群」は、厳島神社境内の奥、弁天沢の中になります。粗粒の花崗岩が節理にそって玉ねぎ状にわれ水に洗われ風化した結果、中心部が球状に残留して、巨岩の累積した形となつたものです。又、天然記念物に指定されており、学術的にも方状節理をもつ粗粒花崗岩に特有の風化現象を示す貴重な資料であり、巨石群をつくるもととなつた花崗岩体は直径1.5kmの岩盤で、石英・斜長石・カリ長石・黒雲母などから成り立っています。(注) 節理・岩石

の規則的なわれ
環境庁・栃木県

この場所は、とても珍しい巨石群が形成しやすい地形であることが、まずわかる。国の天然記念物に指定された巨石がどれほどあるだろう。



名草巨石群 厳島神社・奥の院

それほど貴重で珍しい天然物だと国がお墨付きした巨石群なのだが、果たして全く自然の産物であるものなのか・・・現地を訪れる前から、その点が気になっていた。もし全くの天然のものだとするなら、この地を選び神聖視した誰かの意図を感じ取ることができるだろう。もし少しでも人の手が加わっているとしたら、その意図するところを読み取つてみたいと思う。

(1) 名草弁才天 (厳島神社)
明治の神仏分離令以前は「名草弁才天」と呼ばれていたが、現在は厳島神社と名を変えた。弘仁年間に空海上人が、白い大蛇の道案内により清水流れる大きな岩の前で経文を唱え、水源農耕の守護として弁財天を勧請したのが始まりとされている。さすがに弘法大師プロデュースの巨石の宗教施設だ。広島県の安芸の宮島にも通じる仕掛けが施されている。

だろう。巨大な石仏のようだ。
迫力の存在である。



名草巨石群 嵐島神社・御供石

(2) 弁慶の割石
縦に割れたおむすび型の石。
その片割れに人の顔が現れて
いる（自然にそのように見えるの
か、刻まれているのかは不明）
のを見つけてみんなで大喜びし



弁慶の割石



熊本・押戸石

た。さて、この形状のイワクラを時々見かける。基本はおむすび型の巨石なのだが、頭のてっぺんに割れ目が入れられているのだ。名草の「弁慶の割石」はその割れ目から完全に割れてしまっているが、元は熊本県の押戸石のように、割れ目を表現しているだけにとどめられていたのかも知れない。何を表現しようとしてい

るのだろうか。私にはまるでくちばしのよう見える。そのくちばしは真っ直ぐ天を目指すのではなく、斜めに傾斜し、何かを伝えようとしているようだ。その形から鯨やイルカなどの海洋哺乳類の口を連想されるが、もしかしたら鳥、それも鷹のくちばしかもしれない。というのも、熊本の押戸石もおそらく含まれると思われる宇佐や行橋市など北九州方面に、「タカ」と発音する地名が多く残され、そこに伝わる神話の中に金色の鷹が登場する例がいくつかみられるのだ。最も有名なものは、宇佐神宮の鍛冶翁伝承だろう。中津市の八面山・箭山神社の奥宮のご神体石・鷹石にも鍛冶の神と金色の鷹の伝説がある。この地方の鍛冶に関する伝説には鷹が登場するのだ。東アジア一帯で、鷹は鍛冶鳥と考えられ、鍛治にかかる人々のシンボルとなってきたのだそうだ。そしてくちばしのようなおむすび型の巨石は、それらの伝説地と重なるように置かれている。鷹石をご神体とする箭山神

社の奥宮がある八面山の西麓は、福岡県の上毛町という。偶然以上の繋がりを感じるのは、私だけだろうか。

(3) 厳島神社・奥の院

厳島神社から10分ほど登つたところに奥の院がある。大きさは本殿周辺ほどではないが、ここでも巨石群を見ることができる。ここは、ふたつのエリアに分かれているように見えた。人々と巨石が積み重なるエリアと、巨石の上に土を盛り、舞台のように平らにならしたエリアだ。



厳島神社・奥の院 巨石エリア



厳島神社・奥の院 土盛りエリア

前者は概ね西半分、後者は東半分で、西半分の巨石エリアに対して、東半分の土盛りエリアから祭祀を行つていたのかもしれない。遠くから眺めると、この土盛りエリアは内側に向かつて、石が建てかけられているように見える。この場の土が流れないように石で土台を築き、土留めをして、一段高いエリアを作り出す土木工事が施されている可能性を感じた。さてこのような臺でどんなことが行われていたのだろう。

(4) 御船石とその周辺

石の祠が乗つてゐるのが御船石だ。奥の院の中心をなす石である。もちろん、この御船石単体でもイワクラとしての機能を持ち合わせていると思うが、やはりこの石を中心として周辺の石までをひとつの巨石構築物としてとらえ、巨石群全体でひとつのお化けとしたほうが良いだろう。まず祠を正面から見たアングルから



厳島神社・奥の院 御船石

が多くの見られた。まず目に付いたのが4つに並ぶ盆状穴だった。台形型に並んだその石の直下は、人ひとりが横になつてもぐりこむことが可能な隙間がある。このようなやぐらの形に組まれた石といえば、古墳の石室が連想された。であるなら、この盃状穴がある巨石は天井石の役目を負う。古墳の天井に穿たれた点から星座である可能性を考えた。奈良のキトラ古墳の天井には、内規、外規、赤道、黄道そして北斗七星が描かれ

る。まつたくの自然の状態であるなら、形や大きさが違う複数の石が折り重なつてゐるはずなのに、ここに重なつてゐるのは俗に「笠石」と呼ばれる石の笠の部分を形作るような石が重ねられていることがわかる。丸みを帯びた背を持ち、平らな面を下に伏せ、土台石の上に乗せられた屋根、もしくは蓋のようである。人工的な形状のイワクラだ。この形状を見ても人工的な加工の跡がうががえるのだが、さらに人の手が加わっていることを現すものとして盆状穴が多く見られた。まず目に付いたのが4つに並ぶ盆状穴だった。台形型に並んだその石の直下は、人ひとりが横になつてもぐりこむことが可能な隙間がある。このようなやぐらの形に組まれた石といえば、古墳の石室が連想された。であるなら、この盃状穴がある巨石は天井石の役目を負う。古墳の天井に穿たれた点から星座である可能性を考えた。奈良のキトラ古墳の天井には、内規、外規、赤道、黄道そして北斗七星が描かれ

ていたことを思い出したのだ。この4つの台形型の点の先に、北斗七星の柄を現す3つの点が穿たれているかもしれない。残念ながらその隙間は狭く、中にもぐつて確認することができず、光が足りずにカメラにも捕らえられなかつたが、3つの盃状穴が石の底面にあつた。表面の4つの穴より磨耗して浅くなつているところを見ると、この狭い隙間にもぐりこみ、横たわるということを繰り返していたのだろうか。石の内側は外側表面のようにコケに覆われるとともに、比較的きれいに磨き上げられているように見える。このイワクラは船なのだ。伏せられた丸い巨石は、天に向かつて飛翔するために、船底を天に向け、逆さに伏せられた船なのだ。2～3個の巨石が伏せられていているところをみると、この船は外洋航行も可能なアウトリガータイプの丸木舟を模つてているのだろうか。薄暗い船底のような石の隙間にもぐり、北天の夜空を感得するために入れた北斗の七星。広島や沖縄では



4つの盃状穴 巨石の底面に3つの穴が更に続く

北斗七星を「フナボシ（船星）」と呼ぶ。海にゆかりの深い弁才天や厳島の神々にふさわしい仕掛けではないだろうか。

6. 謎の20度

この御船石の向き、祠の正面に向かつて立つと、真北から東に20度傾いた方角を向くことになる。御船石の主軸もこの方位に並んでいる。今回2度目に検出された方位だ。実

はこの「真北から東に20度傾いた方位」は、以前から気になっていた方位だ。宮崎市田野町に本野原遺跡という西日本最大級の縄文中期後半の環濠集落がある。中心にはストーンサークル、3つの頂が重なる山に向かって大型建物が建つていたと思われる土孔がならび、この山を対象とした祭祀施設であると発表された。この建物跡と思われる土孔の並ぶ方位が真北から東に20度傾いた方位なのだ。さらには、宮崎市から北に80キロ離れた日向市美々津。ここに神武天皇の船出地の伝説が残る港があり、その港を見下ろす石神山の山頂に、山の名前の由来となつた石神巨石群がある。この巨石群の中心のイワクラが向く方角が、真北から東に20度傾いた方位なのだ。イワクラや縄文遺跡にたびたび現れる謎の20度ライン。なぜ20度傾いているのか。明確な理由はまだわかつていない。たとえばゾロアスター教の前身であ

るミトラ教の影響も考えられるだろう。真北から東に20度傾いているということは、真南から西に20度傾いた空を向いていることになる。シリウスやその他の星との関係も考慮したい。日本各地のイワクラと、謎の20度への問題を提起して、上毛のイワクラについての考察を終了したいと思う。

最後に、今回のサミットでお世話を頂いた東京の会員の皆様に、あらためて感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。お世話になりました。

了